

— エレミア 33 章・14-16、1テサロニケ 3 章・12-4・2、ルカ 21 章 25-28、34-36 —

（そのとき、イエスは弟子たちに言われた。）「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に畏のようにあなたがたを襲うことになる。その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」
—ルカ 21 章—

到来

「待降節」の語源は、ラテン語のアドベントスで、「到来」という意味です。聖書によればこの世を創造された神は、この世に二度到来することになっているのです。一度目は、「主の降誕」で、過去の出来事になりましたが、二度目は、本番として予定されている「主の再臨」です。すなわち、神の子キリストが私達の「救いに至る生き方」を示すために人となって来て下さり、世の終わりには、それを生きた私たちの救いを完成させるための再臨です。

今日、待降節第一主日には、世の終わりの「主の再臨」を語る福音が朗読されます。

ところで、神が私達の救いを望んで到来してくださるのに、私たちが、間に合っていて、到来を必要と思わなかったら、神は私達に手出しはなさらず、したがって、私たちの救いは、この世限りの満足で終わり、深い暗闇だけが用意されることになるのです。(ペトロ 2.17)

この世の幸せ、救ってなんでしょう？ 今、楽しくて何の悩みも無いことでしょうか？ ある日、人生の空しさに気づいた中 3 の女学生が、新聞に投稿した悩みです。



「中 2 の夏ごろから、自分はいつか死んでこの世から消えてしまうんだということ意識するようになり、それから、どんなに面白いことや嬉しいことがあっても、その考えが頭の片隅で邪魔をします。そんなことを悩んでもしょうがない。今は生きているんだから今を精一杯楽しめばいいんだと何度も自分に言い聞かせるのですが、どうしても心からそう思うことが出来ず、怖くて不安な気持ちから脱け出せません。恐れるのではなく、受け入れられるようになりたいのですが、それは難しいことでしょうか？」

問題、課題を先延ばしして今の満足を求めて生きているのが、人、大方の人生のようです。莫大な給料を獲得して就任する国の為政者たちと、その支援者たちが選挙で勝利を手にした暁のあの万歳の様は、その後の彼らの生き方、その価値観を象徴しているように見えます。為政者の使命は、自分の支援者たちを満足させることではなく、味方も敵も、全体に公平と正義をもたらす事にある筈ですから！

世界の管理を人間に委ねた神は、人間の生き方がブレる度に、預言者を遣わし、果てはご自身が来られて『道』を示してきましたが、終わりの日には、ご自身が世のすべてを支配なさいます。この時、この世の王や為政者たちと、神の治め方の違いを、混乱と取るか、救いの完成と取るか、私たちの本当の望み、価値観が露わになり、生きて来た結果を、その実りとして刈り取ることになるのです。

人の子の前に立つことが出来るように、いつも目を覚まして祈りを心がけましょう。